

行事報告

3年ぶりに開催！

チャリティーコンサート

ウクライナ難民支援へ寄付



3年ぶりとなる「第13回チャリティーコンサート」(主催 横須賀西ロータリークラブ、協賛 日蓮宗神奈川第二部社教会、横須賀・横須賀北・三浦・横須賀南西各ロータリークラブ)が4月29日に大明寺で開催されました。ゲストに歌手・俳優の岡本和子さん、シンガーソングライターのアキイちこさんを迎え、大明寺合唱団ロータス、住職がドラムを務める「BREY」、そしてお馴染みの「健太康太」が出演。会場は待ちに待った檀信徒や地域の皆さんの歓声に包まれました。



寄せられました寄付は、NPO法人T・M良葉センターを通し、ウクライナ支援に充てられます。同センターではイタリヤ・ポーランドで難民の生活全般にわたる支援活動に携わっており、今回のチャリティーコンサートの寄付で支援物資を整え、現地の支援団体と共同してルーマニアの国境まで届ける予定をしています。ご来場、ご協力ありがとうございました。

年間行事、無事終了

会総会(5月8日)、ほうろく灸(8月8日)、動物季節療法要(9月20・23日)を無事に終えることができました。新型コロナウイルス感染症予防対策にご理解協力をいただきましてありがとうございます。

花まつり法要(4月8日)、動物慰霊祭(4月23日)、千部会・護持



4月8日 花まつり法要



4月23日 動物慰霊祭



5月8日 千部会



5月8日 護持会総会



5月25日中学校校外学習

大明寺

の歴史

大明寺は建長5年(1253)、日蓮聖人が三浦半島に着岸されたことに始まり、明徳年間にこの地に大伽藍が建立されました。今日までの630年という長い歴史をこれから紐解いていきたいと思えます。研究者は、住職の孫で立正大学大学院生の楠山泰誠上人です。

第3回 第二祖日朗上人

前回は、当山中興の祖である第六祖大明房日榮上人の法脈(日蓮聖人の教えの系譜)から、日静上人の法脈である「六条門流」(京都本國寺派)について説明させて頂き、大明寺を金谷に移転し、晩年まで教線を拡大された生涯について考察してみたい。

前回の振り返りとして、「金谷山大妙寺」の開山として日榮上人についての話をさせて頂いたが、日榮上人の生涯には、日蓮聖人最初の檀越として三浦法華堂を建立、寄進された祖父・石渡左衛門、後に大明寺の奥の院となる寺院を開いた平三郎則次夫妻への報恩。そして、三浦法華堂を縁起とした日蓮聖人や日静上人という師への深敬の思いがあった。

ところで、師への孝行といえは「師孝第一」と称される六老僧(日蓮聖人の本弟子六人)の一人、当山第二祖日朗上人が挙げられる。そこで今回は、少し遡って日朗上人にふれていきたい。

文永八年(一二二二)の龍口法難に際し、日蓮聖人の弟子達は北条時頼の家臣であった鎌倉の宿屋光則の邸内(現在の行時山光則寺)にある土牢に捕らわれた。(写真①、②)伝承によると、日朗上人は宿屋の土牢に捕らわれながらも日蓮聖人の安否を気遣い、御題目を唱えていたが、日蓮聖人の佐渡への配流を知ってその無事を願い、土の尊像を造って給仕されたという(写真②は『新編相模国風土記稿』に「今窟内に日朗の像及び五輪塔あり」とあるが、日朗上人が給仕された日蓮聖人の尊像と思いをはせることもできよう)。そして、

佐渡流罪中も身延入山後も鎌倉にて『法華経』の教えを弘められ、日蓮聖人の晩年には最後まで付き添い、亡くなられた後も日朗上人は師の教えを弘め、また弟子の育成に努めていった。「日朗の九鳳」、「九老僧」と称される本弟子の中に当山第三世の日印上人がおり、その弟子日静上人は京都に教えを弘め、日像の四条門流にならぶ六条門流を形

成していく。

日朗上人が土牢に捕らわれた際、日蓮聖人が送ったとされる『土籠御書』には、「あはれ殿は、法華経一部色心二法

共にあそばしたる御身なれば、父母六親一切衆生をもたすけ給べき御身也。法華経を余人のよみ候は、口ばかりことば(言)ばかりはよめども心はよまず。心はよめども身によまず。色心二法共にあそばされたるこそ貴く候へ」と、日朗の身を案じ、法華経色読を讃えられているという。「法華経を余人のよみ候は、口ばかりことば(言)ばかりはよめども心はよまず。心はよめども身によまず」とは、『法華経』を信仰する多くの人はお経文やお題目を讀んでいるだけで、釈尊の「悩み苦しむすべての人びとを救いたい」という御心を理解してはおらず、理解はしているも「自分だけは救われる」という思いがあるため、実践をされていかないという事である。

もし「自分だけは救われる」という思いが日朗上人にあったのなら、日印上人、日静上人と続く法脈も存在せず、今日の当山は存在し得ない。逆にいえば「すべての人びとを救いたい」という釈尊の御心とその心を師と同じように思い、実践(法華経色読)され、法脈を継承された当山歴世の方々をはじめ、縁のある人びと、恩のある人びとによって、今日の金谷山大明寺があり、こうして私たちの多生の縁があるのだと思う。(続)

文責・楠山泰誠



行時山光則寺の土牢



土牢の中の日朗上人像

